

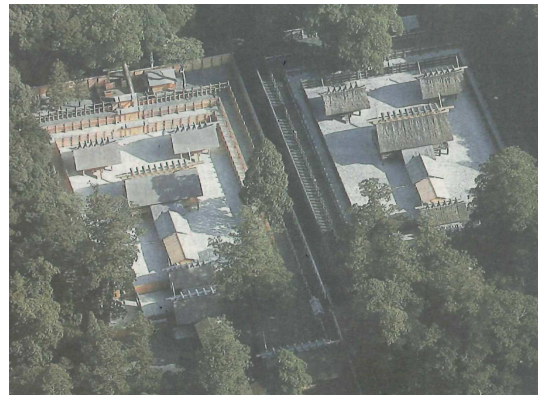
持っていると思う。柱材の杉・檜も 20 年では材木には成長しない。そこで伊勢神宮では広大な鎮守の森を境内に持ち、手入れされた自然林（里山）が神宮の厳かな静寂を醸している。不足分の資材は全国各地から集められる。木材だけでなく、屋根葺き材や関連の資材全てが次の遷宮のために準備される。

材を育てるだけでなく切り出し、搬出、製材、加工、宮大工に亘るまでに多くの人々の伝統的「技と術」が生かされている。宮大工の棟梁を頂点に、神殿建造の技術そのものも大変である。最近の技術はマニュアルが、しっかりしておれば大抵の技術は伝授できるが、宮大工の「技」は継続の職人の「術」が必要で、遷宮以外の日々は全国の文化財の修復で、技術を磨き伝えている。

大阪のように財政難で文化関係の予算が先ず、最初に削減されるようでは、たちどころに生計が成り立たないばかりか、肝心の腕と術が鈍ってしまう。ソフト面の伝承のシステムが確立している、とても貴重な伝統行事である。

目立たないが神官が使う「装束類」も「神宝類」も同様なことが云える。これらは普段一般に需要のないものであるから、20 年毎に新品に取り替えることで、伝統の技を保持しようとの狙いがある。一見無駄のようだが、これも周到に考えられた「無形文化財」の保護策なのでしょう。714 種 1576 点精魂込めた職人さんの「技の結晶」……といえる。

それらを金で現せば 570 億円となるが、1 年に換算すると約 30 億円のコストがかかっている。私には高価なのか安価なのかの判断は付かないが、それにしても国民の税金から支出されていなく、国民の浄財で集められている。その仕組みも「古代からの税制度」並みの伝統のシステムが構築されている。この仕組みがこれらの伝統の技を守っているのだ。



左側が「新正殿」 右が「旧正殿」

報道関係代表撮影 2013.25.9.26 各紙掲載

遷宮のもう一つの意味合いは、「神さまが遷宮によって新しく生まれ変わる」この考え方である。ここには伝統や血統の意味合いは薄れる。古代神話の世界に入りそうだ。先の佐佐木幸綱先生の話に出てきた「改め」の儀式は、我々も今日（こんにち）正月元旦の新年を迎える光厳な気持ちと通じるところがある。過去をキャンセルし新しい気持ちで「神を迎え」「日の出を拝する」自然に手を合わせ礼拝の姿勢に入る。

農耕民族の太陽信仰の残像であっても、何でもよい。理屈はどうであっても「聖なる心根」になることには変わりはない。太陽も海の彼方から昇ってくる。日本の場合山の頂から昇る朝日もあるが、山の彼方には海があってそこから昇って来ると考えた。天＝アマも海＝アマである。天神・海神は同じ「アマの神」となる。島国らしい神話の世界と言える。一方山の頂は天に一番近いから、畝傍山が聖なる山として各地に存在する。畝傍山から昇る太陽が聖なる神と信じられているのだ。ともあれ伊勢神宮の遷宮がもつ意味合いの奥深さに、接して益々感動することになった。

みやげ

6. 宮筒の煙草入れ

伊勢路に残る技

伊勢神宮の遷宮(平成25年10月2日)で湧いた「お伊勢参り」の余韻が続いている。伊勢の東海側からの入り口に当たる津の在所で、伝統工芸の術が残っていると、最近流行りの「旅番組」で実直そうな初老の職人の姿が目についた。

ナレーターの流暢な説明によると、江戸期の「伊勢参りの土産品」としての「煙管(キセル)と煙草入れ」が、宮筒(みやげ)として江戸人に好評であったが、時の流れで消えていた「技(わざ)」を残そうと、「地域起し」に立ち上がった。

煙草(タバコ)はシーボルトが文政6年(1823)日本に初めて伝えてから、忽(たちまち)、江戸人の嗜(たしな)みになった。当然入れ物には趣向を凝らす。外来の煙管や煙草入れは革製で、儒教や仏法思想が定着していた江戸社会では獣の殺傷は忌み嫌われる。革製品は公式な場では使えない不文律の世界に生きていた。況(いわん)や伊勢神宮境内では持ち込み禁止である。

当時の伊勢参りは人生の一大イベントで金比羅参りと人気を分け合っていた。煙草の喫煙も庶民にまで普及し、持てない庶民は露天商での本来茶湯の喫飲用の「一服一銭」に若者を虜(とりこ)にしたと伝えられ、中でも伊勢路の「金唐革の煙草入れ」が最高品であり、伊勢でしか入手できないことが一種のステータスで、庶民の憧れであった。戦後の舶来品の腕時計と同じ感覚なのである。

話が横にそれたが、伊勢の隣の美濃(岐阜県)は今でも日本和紙を代表する良質な「美濃紙」を生産している。元々紙は中国で西暦104年前に紙漉き技術が開発され、漢字と共に6世紀には日本に伝来した。紙の原料になる三桠・楮類に恵まれ、天性の器用さで本家中国を凌駕(りょう)

が)して、品質面では明治期には世界のトップクラスになっていた。明治33年(1900)のパリ万博で「金唐革紙」がグランプリを取ったと伝えられている。

丈夫で分厚い和紙に柿渋を塗り、天日で乾かしそれを100回も繰り返す。面(おもて)のザラザラ感まで本物と変わらない。正式には「金唐革紙」で津では「擬革紙」と称しているようだ。仕上げは漆で色彩も江戸好みにした。伊勢参りのお客さんに宮筒(みやげ)として飛ぶように売れたと伝えられていて、それを町おこしにとの目論見だ。紙製の煙草入れなら伊勢の神様の忌みには触れない。江戸人の知恵と技に感服する。

話はそれるが、一般に土産のことを、その土地の産物の意味で「土産」と書くが、本来は「神様にお供えしたものを、神様からく下げ戴く」の意味で、宮下(みやさげ)が、宮下(みやげ)になったと社家筋から聞いて私はそれを信じている。ところが伊勢の煙草入れの土産に関しては宮筒と書いて「みやげ」と称するそうだ。よほどこの商品が繁盛し感謝の意味で使っているのだろうか。その職人さんに聴いてみたいものである。

偽革のことで思い出した。昭和24年私が小学校に上がる時、母方の神戸の伯父からランドセルを、祝いを兼ねて贈ってきた。ピカピカとは云えないまでも、新調のランドセルは我家では到底買えない代物で、下級吏員の妹家族を思っただけの届け物で、嬉しいやら気恥ずかしい思いで桜吹雪の校門を潜った。戦後物資の欠乏時で「馬糞紙」に防水塗装をしたもので、何時の日か木綿の肩掛け鞆(たもと)に変わっていた。60数年もたち、父母も神戸の伯父たちも今は鬼道の人である。伊勢路の特産工芸品が、忘れかけていた感謝の気持ちを引き寄せてくれた。神戸の伯父たちの六甲の陵(大きな丘)の方向に手を合わせ合掌する。

秦王国の所在地と秦氏の祖・弓月君

の故郷 弓月国の考察

会員 丸谷憲二

1 はじめに

秦氏の初見は 608 年の『隋書倭国伝』の秦王国である。秦王国は『隋書』「列傳第四十六 東夷・倭国」と『北史』「卷 94 列傳第 82」に記録されている。『隋書倭国伝』について検証し、『北史』については「文字の校定以外には資料価値を認めなることができない」との評価があり検証しない。秦王国の所在地と秦氏の祖・弓月君の故郷弓月国について考察する。

2 608 年の記録『隋書倭国伝』

秦王国『隋書』は、二十四史の一つで第 13 番目にあたる。

明年、上遣文林郎裴清使於倭國。度百濟、行至竹島、南望○羅國、經都斯麻國、迴在大海中。又東至一支國、又至竹斯國、又東至秦王國。其人同於華夏、以為夷洲、疑不能明也。又經十餘國、達於海岸。自竹斯國以東、皆附庸於倭。

翌年、上(天子)は文林郎の裴世清を使者として倭国に派遣した。百濟を渡り、竹島に行き着き、南に○羅国を望み、都斯麻国を経て、遙か大海中に在り。また東に一支国に至り、また竹斯国に至り、また東に秦王国に至る。その人は華夏(中華)と同じ、以て夷洲となす。疑わしいが解明は不能である。また十余国を経て、海岸に達した。竹斯国より以東は、いずれも倭に附庸している。

これは 608 年(大業 4 年、推古天皇 16 年)の記録である。小野妹子の遣隋使派遣は 607 年(大業 3 年)であり、その翌年の 608 年の記録である。小野妹子は「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。無恙きや」云々の国書で知られている。

2.1 東洋史の和田清氏(東京帝国大学教授)と石原道博氏(茨城大学教授)説の検証

『隋書倭国伝』	和田清・石原道博説
竹島	朝鮮釜山沖の絶影島か
○羅国	濟州島
都斯麻国	対馬
一支国	壱岐
竹斯国	筑紫
秦王国	巖島(松下見林説)、 周防の音を秦王と記録(山田安栄説) 山陽道西部にあった秦氏の居住区とも関係があるまいか。

2.2 秦王国の所在地の推定

東洋史の和田清・石原道博説では、筑紫までは確認されている。「又、東して秦王国に至る」とあり、松下見林氏(国学)は巖島説、石原道博氏(歴史学)は周防説である。和田清・石原道博説では、「山陽道西部にあった秦氏の居住区とも関係があるまいか。」としている。「山陽道西部にあった秦氏の居住区」が秦王国である。『日本古代地名事典』により、山陽道のハタ地名を調査する。

県別の「ハタ」地名調査結果 単位 数 『新日本地名牽引-第一巻』				
表記 区分	山口県	広島県	岡山県	兵庫県
秦			総社市 1	
畑	20	15	19	7
端	豊浦町 1			
幡			倉敷市・ 牛窓町 2	
合計	21	15	22	7

『和名抄』の県別「ハタ」地名調査結果 単位 数
『古代地名大辞典』『日本古代地名事典』